

Bauddhakośa

科学研究費補助金（基盤(S)）プロジェクト：
仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集（バウッダコーシャ）の構築



研究代表者
斎藤 明

研究代表者挨拶

目次:

研究代表者挨拶	1
本プロジェクトの経緯と概要	2
本プロジェクトに携わる研究者	2
研究会等活動報告	3
研究報告	6
活動報告 第53回国際東方学者会議シンポジウム (日本語版)	11
同(英語版)	13

インド学仏教学の分野は、従来から研究者間の国際交流は盛んであり、国際サンسكريット学会、国際仏教学会、国際チベット学会等の定期的な国際学会のほか、多くのワークショップも随時開催され、専門研究の深化と情報交換の機会提供という両面において多くの実績をあげています。これと並行してまた、各種の大蔵経を含むテキストデータベースや研究論文のデータベース化作業もかなり進展しております。

これに対して、内外の研究者にとって、緊急度がきわめて高いにもかかわらず、これまで手つかずに残されてきたのが、主要な仏教用語に関する定義的あるいは主要な用例集の作成と、それを基礎にした、学界において一つの基準となる翻訳語の策定作業でした。

バウッダコーシャ (Bauddhakośa) と通称される本プロジェクトは、当

該分野における国際的な学術交流の実績と、整備されつつあるテキストおよび文献データベースを活用しながら、この研究上の空白を埋めることを主眼としております。

インド学仏教学の分野において最先端の教育研究に携わる複数の研究者により、それぞれが関与する教育研究の現場における反省とニーズにもとづいて立案された本プロジェクトは、当該分野にとっては画期的な意義をもつと考えられます。インド・中国・日本それぞれの仏教の特色を浮き彫りにし、仏教思想をさらに現代に開かれたものとするためにも、関連分野の専門研究者の意欲と知識を結集することは不可欠であり、内外における当該分野の深化・発展に向け、独創性と貢献度の両面において貴重な成果をもたらすものと期待しております。

本プロジェクトの経緯と概要

本プロジェクトに先立ち、研究代表者は、2007 - 2010年度に「仏教用語の『日英基準訳語集』構築に向けての総合的研究（科学研究費補助金・基盤(A)）」により、4年間の基礎的な研究を遂行してきました。当該研究に関しては、まず 2008年5月16日に開催された第53回国際東方学者会議（於 日本教育会館）において、「仏典翻訳の過去・現在・未来」と題する関連シンポジウムを設け、仏典翻訳をめぐる種々の困難や問題点を討議しました。【本ニューズレター pp. 11 - 15. 参照】このシンポジウムでは、仏典翻訳上の諸問題とあわせ、今後期待される課題と展望をそれぞれの分野の立場から論じ、意見交換を行いました。当該研究では、研究代表者および研究分担者が分野ごとに研究班を設け、実質的な研究を積み重ねました。その研究成果の一端は、2010年9月10日 - 11日に開催された第61回日本印度学仏教学会学術大会（於 立正大）において、「仏教用語の現代語訳と定義的用例集（パウダコーシャ）の構築に向けて」と題するパネルを通して公にしています。このパネルではまず、複数の言語に跨る定義的あるいは主要な用例集を作成するに際して、用例の範疇化と処理を容易にするために各研究班が採用した XML 形式に

ついて、その基本的な理念と応用例を紹介しました。そのうえで、初期仏典、有部アビダルマ、初期中観学説、瑜伽行唯識説、仏教論理学を専門とする各研究班の代表がパネリストとなり、それぞれの研究成果と今後の課題を論じ、多くの参加者とともに活発な意見交換を行いました。

本プロジェクトは、これまでの四年間の関連研究の成果（基盤（A））をふまえ、基本的にそこで確立した方法（XML形式による関連文献・用例の整理）を採用したうえで、およそ 500 の重要な仏教術語について、定義的あるいは主要な用例を訳語の根拠として提示しながら、現代語（日本語・英語）への基準的な訳語集を策定することを直接の目的としています。前者は重要術語に関する定義的用例集（パウダコーシャ）であり、これを基礎として正確で信頼度の高い訳語集を構築することは、関連学界における研究の深化・発展を促すとともに、教育上の画期的なツールになると考えています。

なお、当該プロジェクトの研究成果は『俱舍論を中心とした五位七十五法の定義的用例集』山喜房佛書林、2011年1月 (http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/start_index.html) 他として公刊しました。

本プロジェクトに携わる研究者

研究代表者：

斎藤 明（東京大学人文社会系研究科・教授）

「総括＋インド大乘仏教経論」

研究分担者：

榎本 文雄（大阪大学大学院文学研究科・教授）

「初期仏教関連用語」

佐久間 秀範（筑波大学大学院人文科学研究科・教授）

「瑜伽行唯識思想関連用語」

宮崎 泉（京都大学大学院文学研究科・准教授）

「インド中観思想およびチベット仏教思想関連」

岩田 孝（早稲田大学大学院文学研究科・教授）

「仏教論理学・認識論関連用語」

桜井 宗信（東北大学大学院文学研究科・教授）

「インド密教関連用語」

連携研究者：

渡辺 章悟（東洋大学文学部・教授）

下田 正弘 (東京大学大学院人文社会系研究科・教授)

室寺 義仁 (高野山大学文学部・教授)

桂 紹隆 (龍谷大学文学部・教授)

久間 泰賢 (三重大学人文学部・准教授)

石井 公成 (駒澤大学仏教学部・教授)

末木 文美士 (国際日本文化研究センター・教授)

養輪 顕量 (東京大学大学院人文社会系研究科・教授)

丸井 浩 (東京大学大学院人文社会系研究科・教授)

研究協力者：

Charles Muller (東京大学大学院人文社会系研究科・特任教授)

Jonathan Silk (Leiden Univ.)

ツルティム・ケサン (大谷大学名誉教授)

苦米地 等流 (人文情報学研究所・専任研究員)

何 歆歆 (中国社会科学院)

加藤 弘二郎 (斎藤研究班)

石田 尚敬 (斎藤研究班)

一色 大悟 (斎藤研究班)

新作 慶明 (斎藤研究班)

崔 境眞 (斎藤研究班)

畑 昌利 (榎本研究班)

古川 洋平 (榎本研究班)

釋 妙玄 (佐久間研究班)

三代 舞 (岩田研究班)

佐藤 晃 (岩田研究班)

菊谷 竜太 (桜井研究班)

Paul Harrison (Stanford Univ.)

永崎 研宣 (人文情報学研究所・所長)

叶 少勇 (北京大学)

高橋 晃一 (斎藤研究班)

堀内 俊郎 (斎藤研究班)

松田 訓典 (斎藤研究班)

得能 公明 (斎藤研究班)

鄭 祥教 (斎藤研究班)

河崎 豊 (榎本研究班)

名和 隆乾 (榎本研究班)

岸 清香 (佐久間研究班)

横山 剛 (宮崎研究班)

真鍋 智裕 (岩田研究班)

佐々木 亮 (岩田研究班)

研究会等活動報告

科研(基盤(A))<2007-2010年度> 研究活動報告

「仏教用語の『日英基準訳語集』構築に向けての総合的研究」

2007 (平成19) 年7月7日 (土) 第1回研究会 (平成19年度 第1回研究会)

16:00 ~ 19:30 (於 本郷学士会館 7号室)

議題：本研究の趣旨説明、研究分担テーマの調整・確認、

研究方法、今後の研究計画について、および研究発表

研究発表：丘山 新「文と質—中国における翻訳論争」

2007（平成19）年12月12日（土）インド思想史学会講演

講演：斎藤 明「現代版『翻訳名義大集』の構築に向けて」

2008（平成20）年3月22日（土）第2回研究会（平成19年度 第2回研究会）

16:00～19:30（於 本郷学士会館 3号室）

議題：H19年度の活動報告、研究実績中間報告、次年度の研究計画、
研究組織に関する意見交換と調整、および研究発表

研究実績中間発表：高橋 晃一「『岩波仏教辞典・第二版』収載術語」
一色 大悟「*Abhidharmakośabhāṣya* 使用術語」

研究発表：久間 泰賢「仏教論理学関連の訳語をめぐって」

2008（平成20）年5月16日（金）第53回国際東方学者会議（53rd ICES）

10:30～17:00（於 日本教育会館）

シンポジウムV：仏典翻訳の過去・現在・未来

—『日英基準訳語集』構築に向けて—

【本ニューズレター pp. 11-15. 参照】

2008（平成20）年7月12日（土）第3回研究会（平成20年度 第1回研究会）

16:30～20:00（於 東京大学山上会館 201・202・203会議室）

議題：研究組織について、H20年度前半の活動報告、
今後の作業方針について、および研究発表

研究発表：室寺 義仁「『日英基準訳語集』構築に向けての事例研究
—「十二支縁起」説の場合：伝承（アーガマ）・
教科書（グラ Tantra: シャーストラ, プラカラナ）・
根本頌（ムラカーリカー）・大乘経（マハー
ヤーナ・スートラ）における諸説を巡って—」

2008（平成20）年12月23日（土）第4回研究会（平成20年度 第2回研究会）

15:30～20:00（於 東京大学山上会館 地下002会議室）

議題：翻訳語データの入力に関するデモンストレーション、翻訳語収集・
整理方法に関する意見交換、各研究分担者の現状報告、および研究発表

研究発表：横山 紘一「仏教用語の現代語訳をめぐる諸問題
—『唯識・仏教辞典』の刊行を目指して—」

2009（平成21）年3月7日（土）第5回研究会（平成20年度 第3回研究会）

16:00～19:00（於 東京大学法文1号館 210号教室）

議題：平成20年度の活動報告、連携研究者・分担者の作業進捗状況
に関する報告、次年度の作業の進め方についての討議

2009（平成21）年7月11日（土）第6回研究会（平成21年度 第1回研究会）

15:00～20:00（於 東京大学山上会館 地下001会議室）

議題：同研究会の活動報告、今後の作業方針の確認、および研究発表
整理方法に関する意見交換、各研究分担者の現状報告、および研究発表

研究発表：Charles Muller “Various Problematic Terms in English Translation”

2010（平成22）年3月26日（金）第7回研究会（平成21年度 第2回研究会）

15:00～20:00（於 東京大学山上会館 地下001・203会議室）

議題：榎本研究班、室寺研究班、久間研究班、および斎藤研究班の
今年度の成果報告、および次年度活動計画について

2010（平成22）年7月24日（土）第8回研究会（平成22年度 第1回研究会）

16:00～20:00（於 フォーレスト本郷1階ホール）

議題：印仏学会パネルの打ち合わせ、および最終成果取りまとめに関する討議

2010（平成22）年9月11日（土）第61回日本印度学仏教学会学術大会パネル発表

13:40～16:10（於 立正大学）

発表：高橋 晃一「五位七十五法の現代語訳と定義的用例に関して」

畑 昌利「初期仏教関連の用語をめぐって」

斎藤 明「プラパンチャ（戯論）とは何か

—ナーガールジュナの解釈を中心として—

室寺 義仁「大乘経を典拠とする「唯心」と「唯識」の用例

提示に向けての試案」

久間 泰賢「仏教論理学関連用語の現代語訳をめぐって」

パネル発表報告：代表 斎藤 明「仏教用語の現代語訳と定義的用例集（バウッダコーシャ）の構築に向けて」

【『印度学仏教学研究』59-2, pp.(271)-(272). に掲載】

2011（平成23）年3月22日（火）第9回研究会（平成22年度 第2回研究会）

16:00～21:00（於 東京大学山上会館 地下002会議室）

議題：研究成果報告および今後の展望をめぐって

科研(基盤(S))<2011年度一> 研究活動報告

「仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集（バウッダコーシャ）の構築」

2011（平成23）年10月8日（土）第1回研究会（平成23年度 第1回研究会）

16:00～20:00（於 東京大学山上会館 地下002会議室）

議題：昨年までに完了した「仏教用語の現代基準訳語集構築に向けての総合的研究」の成果報告、上記研究に基づくウェブ語彙集の解説、バウッダコーシャ作成の基本方針の説明、研究分担者の作業分担の確認、次回研究会までに進めておくべき作業の指示

2012（平成24）年3月14日（水）第2回研究会（平成23年度 第2回研究会）

16:00～18:30（於 東京大学山上会館 地下002会議室）

議題：本年度内の活動の総括的報告と来年度の活動予定についての説明、各研究班の活動実績の報告

2012（平成24）年7月14日（土）第3回研究会（平成24年度 第1回研究会）

14:00～18:00（於 東京大学仏教青年会 ホールA）

議題：各研究班の報告、「ニューズレター」刊行に関する検討、および研究発表

研究発表：ツルティム・ケサン「 Rondolramaによる因明関連術語の規定をめぐって」

（参考資料：「Rondolrama著『量評釈』など因明所出の名目」）

研究報告

「初期仏教における仏教術語の定義的用例集」をめぐって — 課題と展望 —

河崎 豊

【0】はじめに

筆者は、「仏教用語の『日英基準訳語集』構築に向けての総合的研究」科学研究費補助金・基盤研究(A)において、榎本文雄教授(大阪大学)をリーダーとする研究班 — 「初期仏教班」の一員として、畑昌利博士と共同で「初期仏教における仏教術語の定義的用例集」の構築に向けて作業を継続してきた。本稿では、これら一連の作業の総括として、三節に分けて報告する — 【1】：我々がどのような方針に基づいて収集語彙を決定しかつ検討を行なったかを提示する；【2】：調査の過程で現れた幾つかの問題点を提示する；【3】：【1】および【2】を回顧しつつ今後の展望について私案を述べる¹。

【1】調査語彙

今回、収集範囲をテーラヴァーダの文献に限定することは予め決定されており、我々はその範囲でどの術語を調査対象とすべきかについて検討を重ねた。そして最終的な方向性を、

【方針(1)-(3)】

- (1) 法数としてある程度まとまった形で出現するもの
- (2) 教義上重要と考えられるもの
- (3) 定義的用例を比較的容易に見出す可能性が高いもの

の三点に定めた。この【方針(1)-(3)】の下、我々が扱ったのは次に示す術語群である：

- (1) 三十七菩提分法 (bodhipakkhiyā dhammā) :
四念処・四正勤・四神足・五根・五力・
七覚支・八正道
- (2) その他法数：十善業道、四摂事
- (3) 非仏教的用語：titthakara 等

- (4) 煩惱関連語彙：
issā, uddhacca, upanāha, ottappa, kāmacchanda, kukkuccha, kosajja, makkha, macchariya, vicikicchā, hirī
- (5) パーリにおける難語：
apadāna, eḷamūga, kāmabhoga
- (6) その他：
avyākata, upāyakosalla, upāsaka, upāsikā, tādin, paṇidhāna, paṇidhi, brahmacarya, mahāpurisalakkhaṇa, yogakkhema

今回、検討の中心となったのは(1)の三十七菩提分法である。これは、【方針(1)-(3)】を概ね満たすものと看做されたゆえである。(2)以降は、【方針(1)-(3)】が最終的に確定するまでの間、畑昌利および筆者が各々の関心に基づいて試験的に調査を行なったものである²。上記のデータ全ては、斎藤明教授の研究班の成果である「俱舍論を中心とした五位七十五法の定義的用例集」のインターネット公開版³と同様、インターネット上での公開を目指し、高橋晃一博士により提供されたXML (Extensible Markup Language) フォーマットに基づき作成された。当「初期仏教」班のフォーマットでは、現在のところ【訳例】を提示した後、その訳語を支持する【定義的説明】に続き、【語源解釈的説明】および【ニカーヤにおける用例】が列挙される仕様となっている。

【2】調査における若干の課題

本節では、上記の調査術語の中から、「三十七菩提分法」から二つ、「煩惱関連語彙」から一つ、合計三つの術語を抽出し、調査の過程で我々が直面した若干の課題について報告する。

1 本稿は、2011年3月22日に東京大学本郷キャンパス山上会館で開催された研究会で、筆者が口頭発表した内容に概ね基づいている。発表時には斎藤明教授、下田正弘教授をはじめとする参加者の諸先生方にご助言を賜った。ここに記して感謝申し上げます。

2 上記「煩惱関連語彙」が、所謂の大小煩惱地法の途中で停止しているのは、上記(1)-(3)の方針に固定した後これら調査を中断したためでもあるが、この種の煩惱関連の術語を扱うことに若干の問題を感じたことも大きい。これについては本文中述べる。

3 http://www.l.u-tokyo.ac.jp/intetsu/html/akbh_75dhammas.html (最終アクセス：2011/04/14 10:52)

当初我々は、「三十七菩提分法」の各項目で使用される術語が【方針 (1)-(3)】を概ね満たし、比較的容易に調査を進め得ると予想していた。だが実際に調査を進めると、大雑把に言って以下の如き問題に絶えず直面することとなった。一つは、「<定義的用例>を見出すことの困難さ」、もう一つは「収集資料と<初期仏教>との間の径庭」である。以下、具体的事例に基づきそれらを確認する。第一例は、畑昌利が担当した⁴ cattāro satipaṭṭhānā 「四念処」である：

《事例① cattāro satipaṭṭhānā》

【訳例】4種の、思念状態の持続

【定義的用例】

【和訳】4種の、思念状態の持続とは、身体をくまなく観察する思念状態の持続が14通り、感覚をくまなく観察する思念状態の持続が9通り、心をくまなく観察する思念状態の持続が16通り、教法をくまなく観察する思念状態の持続が5通りである。

【原文】cattāro satipaṭṭhānā ti cuddasa-vidhena kāyānupassanāsatiṭṭhānaṃ, nava-vidhena vedanānupassanā-satiṭṭhānaṃ, soḷasa-vidhena cittānupassanā-satiṭṭhānaṃ, pañcavidhena dhammānupassanā-satiṭṭhānaṃ. (Sumaṅgalavilāsini III 883, The Pali Text Society)

【ニカーヤなどにおける用例】

【和訳】比丘たちよ、この一本道は、生き物達の浄化、憂いや嘆きの克服、苦しみや心痛の消去、知るべきことへの到達、安らぎの境地（涅槃）を目の当たりにすることへ向かっている。

〔それは〕すなわち、4種の、思念状態の持続である。いずれの4種か。比丘たちよ、ここで比丘は (1) 熱心に、はっきりとした意識を持って、思念を有し、身体において身体をくまなく観察して過ごしている、世間への強欲や心痛を制御して後に。(2) 熱心に、はっきりとした意識を持って、思念を有し、感覚において感覚をくまなく観察して過ごしている、世間への強欲や心痛を制御して後に。(3) 熱心に、はっきりとした意識を持って、思念を有し、心において心をくまなく観察して過ごしている、世間への強欲や心痛を制御して後に。(4) 熱心に、はっきりとした意識を持って、思念を有し、教法において教法をくまなく観察して過ごしている、世間への強欲や心痛を制御して後に。

【原文】ekāyano ayaṃ bhikkhave maggo sattānaṃ visuddhiyā sokapariddavānaṃ samat-

ikkamāya dukkhadomanassānaṃ atthagamāya nāyassa adhigamāya nibbānassa sacchikiriyāya, yadidaṃ cattāro satipaṭṭhānā. katame cattāro? idha bhikkhave bhikkhū kāye kāyānupassī viharati ātāpī sampajāno satimā, vineyya loke abhijjhādomanassaṃ — vedanāsu vedanānupassī viharati ātāpī sampajāno satimā, vineyya loke abhijjhādomanassaṃ — citte cittānupassī viharati ātāpī sampajāno satimā, vineyya loke abhijjhādomanassaṃ — dhammesu dhammānupassī viharati ātāpī sampajāno satimā, vineyya loke abhijjhādomanassaṃ. (Dīghanikāya II, 290, The Pali Text Society)

これらの用例で示されていることは、四念処の各項目下で何を実践し、また何種類あるかという、言わば四念処の内容説明だが、この例だけで四念処の「定義的用例」を完結させることには問題があろう。例えば、sati や (u)paṭṭhāna という語自体が如何なる概念の下で使用されているのか、あるいは、sati と (u)paṭṭhāna の複合語における関係を明示する、といった、術語そのものに対する定義も合わせて提示される方が望ましい。実際、上記の例が sati を「思念状態」、(u)paṭṭhāna を「持続」と訳す根拠であり得るやと問われれば、それに「然り」と答えることは難しかろう。しかし、そのようなことを明確に規定する例を見出すことは困難なようである⁵。これは、筆者も他の術語を調査してしばしば実感したことである。どの語を扱うにせよ、それに対する — 俱舍論を中心とした五位七十五法に対する定義的用例、に類するような — 定義的用例を見出すことは、(少なくとも筆者の経験上、スッタ・ピタカ部分では) 困難な場合が甚だ多いと思われる⁶。

もちろん、調査の範囲を拡大すれば、定義的用例らしきものを見出すことは可能である。実際、上記の四念処における【定義的用例】は、アッタカターからの例である(但し、先に述べたような「定義」的な例にはなっていない)。また以下に引用する、「五力」の一つである viriyabala 「勇猛さの力」⁷の例(筆者担当)では、アビダンマ(的)文献の例を使用している：

《事例② viriyabala》

【訳例】勇猛さの力

【定義的説明】

[1] 【和訳】 托鉢修行者たちよ、ここで立派な人

4 以下に挙げる三例の日本語訳については、最終的に「初期仏教班」全員で検討を行なったものであることを断っておく。

5 パーリ仏典における念処を扱った Rupert M.L.Gethin, *The Buddhist Path to Awakening* (Brill, 1992) でも、上記の如き意味での「定義」という例は、アビダンマ文献や Buddhaghosa 著作に拠っている。

6 もっとも、仮に律の術語を扱っていれば、状況は異なっていた可能性 — つまりヴィナヤ・ピタカ自体から定義的用例を回収し得、注釈文献を利用する必要がない — がある。

7 これを genitive tatpuruṣa 複合語の如く訳したのは暫定的なものである。

の弟子は、善くない諸々のことがらを棄てるため、〔そして〕善いもろもろのことがらを具えるために、勇猛さを獲得し、力強さを持ち、邁進する力を確固たるものとし、もろもろの善いことがらにおける重荷を下ろすことなく、活動する。これが、托鉢修行者たちよ、**勇猛さの力**と言われる。

【原文】 idha bhikkhave ariyasāvako āradhavi-
yo viharati akusalānaṃ dhammānaṃ pahānāya,
kusalānaṃ dhammānaṃ upasampadāya, thāma-
vaḍḍhaparakkamo anikkhattadhuro kusa-
lesu dhammesu. idaṃ vuccati bhikkhave **viriyabalaṃ**.

(Aṅguttaranikāya III, 11, The Pali Text Society)

【2】〔和訳〕そして、托鉢修行者たちよ、いづくに**勇猛さの力**が見出されるべきか？四つの正しい奮励（四正勤）においてである。ここに、**勇猛さの力**が見出されるべきである。

【原文】 kattha ca bhikkhave viriyabalaṃ datṭhab-
baṃ. catūsu sammappadhānesu ettha **viriyabalaṃ**
datṭhabbaṃ. (Aṅguttaranikāya III 12, The Pali Text Society)

【3】〔和訳〕**勇猛さの力**には、怠惰であることへ動揺しない、という意味があると理解すべきである。

【原文】 viriyabalassa kosajje akampiyatṭho abh-
iññeyyo. (Paṭisambhidāmagga I, 16, The Pali Text Society)

【4】〔和訳〕その時、いずれのものが〔有漏の状態下での〕**勇猛さの力**となるのか？その時に、心的な勇猛さの獲得、尽力、邁進、発奮、奮闘、奮迅、力強さ、堅固さ、しっかりと邁進する状態、意欲を放り棄てない状態、重荷を放り棄てない状態、重荷を堅持する状態、勇猛さ、勇猛さの能力、**勇猛さの力**、正しい努力があるならば、その時にこれが〔有漏の状態下での〕**勇猛さの力**となる。

【原文】 katamaṃ tasmim samaye viriyabalaṃ
hoti. yo tasmim samaye cetasiko viriyārambho nikka-
mo parakkamo uyyāmo vāyāmo ussāho ussoḷhi thāmo
dhiti asithilaparakkamatā anikkhattachandatā anikkhit-
tadhuratā dhurasampaggāho viriyaṃ viriyindriyaṃ
viriyabalaṃ sammāvāyāmo idaṃ tasmim samaye
viriyabalaṃ hoti. (Dhammasaṅgaṇi 12-13, The Pali Text Society)

【5】〔和訳〕その時、いずれのものが〔無漏の状態下での〕**勇猛さの力**となるのか？その時に、心的な勇猛さの獲得、尽力、邁進、発奮、奮闘、奮迅、力強さ、堅固さ、しっかりと邁進する状態、意欲を放り棄てない状態、重荷を放り

棄てない状態、重荷を堅持する状態、勇猛さ、勇猛さの能力、**勇猛さの力**、正しい努力、勇猛さという優れた宗教的覚醒の要素、道の要素、道へ完全に到達していることがあれば、その時にこれが〔無漏の状態下での〕**勇猛さの力**となる。

【原文】 katamaṃ tasmim samaye viriyabalaṃ
hoti. yo tasmim samaye cetasiko viriyārambho nikka-
mo parakkamo uyyāmo vāyāmo ussāho ussoḷhi
thāmo dhiti asithilaparakkamatā anikkhattachandatā
anikkhattadhuratā dhurasampaggāho viriyaṃ viri-
yindriyaṃ **viriyabalaṃ** sammāvāyāmo viriyasam-
bojjhaṅgo maggaṅgaṃ maggapariyāpannaṃ idaṃ
tasmim samaye **viriyabalaṃ** hoti. (Dhammasaṅgaṇi
12-13, The Pali Text Society)

[1] では、thāmat や dalhaparakkama 等が viriyabala の内容を説明する際に使用されるが、これらは viriyabala に対する類義語の一種と看做されているように思われる。無論、当該例のみでは推定の域を出ないが、[2] で四正勤と関連付けられること、また [4] [5] における viriyārambha や nikkama 等が viriyabala に対する類義語の羅列であることは明白であること⁸、更に [3] で明らかに viriya を kosajja 「懈怠」の反対概念としていることから、その推定は補強されるだろう。そしてこのような類義語の羅列、もしくは反対概念の提示は、viriyabala の概念を規定する「定義的用例」と看做して差支えないと思われる。

問題は、[3] [4] [5] がテーラヴァーダの三蔵でも比較的后代の成立と想定されているアビダンマ文献（及びそれに類する Paṭisambhidāmagga）からの例であることだろう。このように、比較的后代の成立と目される聖典資料からであれば、上記の如き用例を抽出することは比較的容易である。更に、範囲をアッタカターやティーカーにまで拡大すれば、より明確な定義的用例を発見し得る場合もあろう。しかし、この種の文献は、テーラヴァーダ内部で教義が体系化されていく（あるいは、された）段階で成立していったものである。そして、かかる文献群から抽出された用例をもって「テーラヴァーダにおける定義的用例」とするならともかく、「初期仏教における定義的用例」として提示することには、違和感を覚える研究者も多いのではないか（例えば六足・発智からの例をもって「初期仏教における定義的用例」と主張することを想

8 五根中の viriyindriya 「精進根」、八正道中の sammāvāyāma 「正精進」、また七覚支中の viriyasambojjhaṅga 「精進覚支」が、viriyabala と特別な区別を設けられずに同義語と理解されていることに注意せよ。

像されたい)⁹。

同様の例をもう一つ挙げる。同じく筆者が kukkucca「悪作」に対して作成した資料である：

《事例③ kukkucca》

【訳例 1】悪行

【定義的説明】

【和訳】手による悪行も悪行である。足による悪行も悪行である。手と足による悪行も悪行である…

【原文】 hatthakukkuccam pi kukkuccam, pādakukkuccam pi kukkuccam, hatthapādakukkuccam pi kukkuccam … (Mahāniddeśa I, 218, The Pali Text Society)

【ニカーヤなどにおける用例】

【和訳】瞑想をする者として、ぶらぶら歩く者であるべきではない。悪行を止めるべきであり、ぼんやりとしているべきではない。次に、音の少ない諸々の座や寝床で托鉢修行者は過ぎべきである。

【原文】

jhāyī na pādalo' assa virame kukkuccam nappamajjeyya /
atha āsanesu sayanesu appasaddesu bhikkhu vihareyya //

(Suttanipāta verse 180, The Pali Text Society)

【訳例 2】悪行をしたと悔やむ気持ち

【定義的説明】

【和訳】許可されていないものに関して許可されているものだという想いがあること、許可されているものに関して許可されていないものだという想いがあること、回避されるべきではないことに関して回避されるべきだという想いがあること、回避されるべきであることに関して回避されるべきでないという想いがあること — 以上のような特質を有する、悪行をしたと悔やむ気持ち、悪い事をしてしまったという気持ち、悪い事をしてしまい心配している状態、心的後悔、思考が掻きむしられること — それが悪行をしたと悔やむ気持ちであると言われる。

【原文】 akappiye kappiyasaññitā, kappiye akappiyasaññitā, avajje vajjasaññitā, vaje avajjasaññitā, yaṃ evarūpaṃ kukkuccam kukkuccāyanā kukkuccāyittam cetaso vipphaṣāro manovilekha idaṃ vuccati kukkuccam. (Dhammasaṅgaṇi 205, The Pali Text Society)

【ニカーヤなどにおける用例】

【和訳】幸いなる方よ、確かに私には、少なからず、悪行をしたと悔やむ気持ちがあり、少なからぬ悔恨があります。

【原文】 taggha me bhante anappakaṃ kukkuccam anappako ca vipphaṣāro ti. (Samyuttanikāya III, 120, The Pali Text Society)

kukkucca — 俱舍論の kauṛṭya — は、説一切有部アビダルマでは「後悔」と定義されるが¹⁰、パーリの特に四ニカーヤ中で明確にその意味で使用される例を発見することは然程容易ではない。例えば【訳例 1】の【ニカーヤなどにおける用例】で引いたものは、最古の仏典の一つと目される Suttanipāta からの例だが、「kukkucca を vi-vram すべし」という以上、当該例における kukkucca が「後悔」を意味するとは考えがたい。同経典に対する注釈であり、【訳例 1】の【定義的用例】で引用した Mahāniddeśa の例でも同様に、これを「手による後悔」「足による後悔」と見ることは難しいであろう。

一方、同術語が明確に「悪いことをしたと悔やむ気持ち」を意味すると理解可能なものは、パーリ・アビダンマ文献の一つである、Dhammasaṅgaṇi の例 (→【訳例 2】の【定義的用例】) である。このように、アビダンマではかかる意味と定義付けられるが、この例を用いて「初期仏教における定義的用例」と言うべきか否か、という問題があることは《事例②》と同様である。なお、当該の意味での【ニカーヤなどにおける例】として引用したものは、本当にそのような意味で用いられているかという微妙な点がある¹¹。

【3】今後に向けて

以上、実際に作業を進めてみて行き当たった

9 無論これは、何を「初期仏教」とするか、ということに深く関連する。例えば、「現存三蔵文献から再構成される仏教」が「初期仏教」である、と予めこちら側で明示した上で資料を提示すれば、問題はないかも知れない。それでも、成立年代が明らかに異なるであろう複数の資料を、横一線（等価のものらしく見えるような形で）インターネット上に公開した場合、閲覧者がインド仏教の研究者であればともかく、一般の方々に対してはあらぬ誤解を誘発する危険性は一応覚悟しておく必要がある。なお、「初期」という表現そのものの妥当性についても、大乘経典の古写本が発見・出版されつつある状況では、いずれ再検討を迫られる可能性があるが、ここではその問題はひとまず置いておきたい。

10 斎藤明（代表）、高橋晃一・堀内俊郎・松田訓典・一色大悟・岸清香『『俱舍論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集 — 仏教用語の用例集（パウダゴコーシャ）および現代基準訳語集 1 —』（山喜房佛書林, 2011）, p.140f.

11 第二案：「幸いなる方よ、確かに私は、少なからぬ悪行を犯してしまいました。そして私には〔悪行を犯したことについて〕少なからぬ悔恨がございます」。実際のところ、文章だけを見れば「悪行」とも「後悔」とも訳し得、判断をつけることは難しい。現時点では（過去の諸訳例も参照して）本文にて訳した如き意味で使用されていると看做したものの、再検討の余地はある。

幾つかの問題点を、具体的に収集例を示しつつ述べてきた。最後に、これまでの論点を回顧しつつ、今後同様の作業を進めるに際してどのような方針を取るべきか、私案を二つ提示することで本稿の結論にかえる。

【1】で述べた通り、今回我々が扱った資料はテラヴァーダの聖典にほぼ限定される。これを初期仏教聖典の一つと看做すことは妥当だろうが、当該聖典資料のみに依拠し「初期仏教における仏教術語の定義的用例」である、とすることには、違和感を抱く専門家が出現することが予想される上、専門的知識を有さない一般の閲覧者に誤解を与える可能性もある。また【2】で確認したように、定義的用例らしきものを抽出しようとするれば、聖典でも後期の成立と目されるアビダンマ、あるいは聖典を離れてアッタカターやティーカー文献に依拠する場合が多くなるが、これらの資料が混在した用例集は、むしろ「テラヴァーダの伝統に基づく、初期仏教術語の定義的用例」とでも呼ぶべきであろう。またそのような名称を冠するとしても、単一の部派の文献内でも成立年代の異なることが（ある程度は）明白な諸資料を同一線上に提示することは問題であり、見せ方に何らかの工夫を施す必要が生じるだろう。

では、「初期仏教における」という立場を堅持する場合、今後どのような方向性で臨むべきだろうか。「初期仏教」の射程をどう見るかにもよるが、例えば註9で触れたような範囲を設定するとすれば、「現存する初期仏教聖典については漢訳やチベット語訳などの翻訳文献、またサンスクリット語等で残るインド諸語による経典断片も含め、参照し得る聖典資料は全て調査対象とし、網羅的に用例を抽出してそれらを提示する」という方式が一つの案として考えられる。実際、初期仏教における術語を研究する際には、いかなる場合でもかかる作業は必ず含まれる¹²が、その調査において収集されるであろう諸用例を提示するという方法である。

もっとも、このような網羅的情報を仮に斎藤明教授の研究班にて行われたのと同様に、インターネット上で公開することを目指す場合、そこにどのような設計を施し、かつ利用者の利便性を高めるかについて相当な議論が必要である。複数部派の、時代的にも複数層に跨るであろう三蔵資料を提示するのだから、単一部派の

資料提示の場合よりも、その見せ方にはより一層慎重な処理が求められる。当然、このような形でのデータの蓄積は研究者には極めて有意義だが、かかる専門性への（過度の）傾斜が、非研究者・一般利用者層への配慮不足を誘発する可能性も想定され得る。また、このような調査方法を取っても、例えば俱舍論などの論書における「定義」のような、明確な定義的用例を見出し得るかということ、これまでの我々の調査経験からしても不透明な部分があり、研究の見通しを立てることはそれほど容易ではない。更に、扱う文献の量が飛躍的に増加するのであるから、今回の研究期間における成果と同様の質・量を保つには、文献学の訓練を十分に受けた更なる協力者を求めるか、もしくは調査語数をかなり限定する必要があるだろう。

一方、「初期仏教」という括りに拘らないなら、調査する文献の範囲を思い切って絞ること、例えばある単一の部派において「確実に明確な定義付けをする文献」に範囲を限定することも考えられる。テラヴァーダならば例えばアビダンマ文献、あるいは更に時代を下らせてブッダゴーサ諸著作やダンマパーラ諸著作に調査範囲を限定し、その範囲内で任意の術語群に対し調査を行なうのである。かかる方針の下で作成される資料は当然「部派仏教」、もしくは「特定の論師（例えばブッダゴーサ）」から見た（初期）仏教術語の定義的用例集であって、「初期仏教における」ではない。しかし、この種の方針に移行することは、現状では第一案よりも現実的であり、到達点への見通しも立てやすいと予想する。また、純粹に学問的な成果としても、例えば「ブッダゴーサによる解釈例集」、あるいは「アビダンマ文献における解釈例集」の如きものは（少なくとも日本人利用者が誰にでも手にし得る形では）存在しないのだから、これを出版のみならずインターネット上で公開することをも視野に入れて作成すれば、研究史上大きな財産にもなると考えられる。

以上、本稿では榎本文雄教授をリーダーとする「初期仏教における仏教術語の定義的用例集」作業班における報告を行なった。

12 これは「必要」な作業であって、「十分」な作業ではない。初期仏教に関して術語の意味を確定する際に踏むのが望ましい作業については、榎本文雄「四聖諦の原意とインド仏教における「聖」」『印度哲学仏教学』24（2009），pp.(1)-(19)，esp., p.(1)を見よ。

活動報告

2008（平成20）年5月16日（金） 第53回国際東方学者会議（53rd ICES）

10:30～17:00（於 日本教育会館）
シンポジウムV：

「仏典翻訳の過去・現在・未来 — 『日英基準訳語集』構築に向けて—」 齋藤 明

仏教の経典や論書には夥しい数の専門用語が登場する。その中の多くは、サンスクリット語やパーリ語をふくむ中期インドアリアン語を基礎としながら他の諸言語への訳語、とくに漢訳語として定着した術語（「四聖諦」「五蘊（陰）」「無我」「縁起」等々）として東アジアの仏教世界において広く受容され、今日にいたっている。また、これらの専門用語には、インド由来の概念を基礎としながらも、中国仏教の展開過程において成立した術語（「理事無礙」「十界互具」「草木成仏」等々）も少なくない。

いずれも、ゴータマ・ブッダはもとより、経律両典の伝承者や諸論師の研ぎ澄まされた知性や感性が反映したものと見えるが、加えて、諸経論の翻訳者、さらには思想史的な背景や学派の伝統をふまえながら、それぞれの思想を表明するに相応しい術語を創造した諸論師の苦労も見のがせない。伝統的な術語の中には、「縁起」「無我（非我）」「中道」など、簡にして要を得た絶妙な訳語も多く、これらはすでに日本語として定着して久しい。

しかしながら、2400年を越える歴史を刻んできた仏教にとって、これら多くの術語の意味をそれぞれの文脈において再検証し、その上で、学界の衆知を結集して、これらの術語を現代語として蘇生させるといった試みはきわめて重要な意味をもつ作業と考えられる。その目的は、インドにおいて成立した主要な経論を取りあげ、そこに採用される術語の定義—あるいは規定—を抽出し、比較検討を加えるとともに、それらの基準的な訳語を確定し、その研究成果をもって、学界における本格的な検討に向け、実質的な問題提起をなすことにある。

現代日本語への翻訳に際しては、哲学・倫理学、中国思想文化学、宗教学等の隣接分野における専門用語の翻訳事情を勘案するとともに、日本語・日本文学等の関連分野における仏教用語の定着度を考慮することも欠かせない。とともにま

た、その評価はさておき、現代における文化レベルでのグローバル化（越境、全球化）現象を直視するとき、国や民族の相違を超えて共通語としての機能を増大しつつある英語への翻訳もまた視野に入れ、国際的な学术交流のもと、積極的に対応することが求められると認識している。

本シンポジウムは、このような認識を共有する七人の研究者をパネリストに迎え、また荒牧教授をコメンテーターとして、仏典翻訳をめぐるさまざまな問題を縦横に議論する場を提供することを目的として立案された。

シンポジウムでは、総合司会の齋藤明が以上のようなシンポジウムの趣旨を簡単に説明したのち、各パネリストを紹介するとともに、シンポジウム全体の進行プランを説明した。

榎本文雄氏（大阪大学教授）は、「初期仏教の基本的術語とその翻訳上の諸問題」と題して、まず仏教術語の意味を確定するために求められる調査手順に論及した。その上で氏は「四聖諦」を例として採りあげ詳論した。氏によれば、文献上の用例や規定に見るかぎり、「聖諦」（*āryasatya*, *ariyasacca*）の「聖」（*ārya*）は「聖なる」という形容詞で同格限定複合語の前分として用いられることは実際にはなく、むしろそれは如来や、独覚・声聞、さらには広く「立派な人々」「貴人」の意味で人をさし、格限定複合語の前分としてはたらき、したがって「聖諦」は「立派な人（々）にとっての事実／真実」を意味することになると結論した。

つづいて佐古年穂氏（駿河台大学教授）は、「アビダルマ術語をめぐる翻訳上の諸問題」と題する発表を行い、『阿毘達磨俱舍論』を通して、説一切有部が挙げる小煩惱地法（煩惱心を基盤（地）として起こりうる十の心作用）を考察した。その中で氏は、それぞれの術語に関する定義的な説明文を抽出した上で、当該術語の

サンスクリット語、玄奘訳、真谛訳を比較検討し、現代語に翻訳する際の留意点を詳論した。たとえば「覆」（真谛訳「覆蔵」「恨」）と漢訳される *mraṅka* は、「過失を覆い隠すこと」という定義的な説明にしたがえば、「隠蔽」や *concealing* 等の現代語訳が提案されうるという。

桂紹隆氏（龍谷大学教授）は、「仏教知識論の諸術語の現代語訳をめぐる諸問題」と題して、仏教知識論（知覚論・推理論を含む）の分野における諸術語をいかに現代語訳するかをめぐる、いくつかの実例（「異品」*vipakṣa*、「相違」*viruddha*、*virodha* 等）をあげながら詳論した。とくに玄奘訳のメリットとデメリットをふまえ、西洋哲学において定着した訳語を用いることの適否に関しては、個々の術語に即して慎重に対処すべき課題であるとした。これと併せて氏は、術語の意味を確定するうえで有効なツールとなりうる関連研究のいくつかを紹介した。

午後に入って、斎藤明（東京大学教授）は「チベット語訳の特質とその諸問題」と題する発表を行い、チベット語訳経史を概観した上で、仏教術語をチベット語に翻訳する際の基準として 814 年に作成された『訳語詳解大集』*Mahāvīyūtpatti* と、その難語釈ともいべき『同中集』*Madhyavīyūtpatti* の特色を論じた。とくに、「仏」*buddha* に対するチベット語訳 *sangs rgyas* 「目覚め、開かれた方」や、「世尊」*bhagavat* の同訳 *bcom ldan 'das* 「〔魔を〕征服し、〔徳を〕もち、超えられた方」等の訳例にうかがえるチベット語訳の一総合的ともいえる一特色の一端を考察した。

丘山新氏（東京大学教授）は、「文と質—中国における翻訳論争」と題する発表を通して、中国における訳経史上の翻訳論争を紹介しながら、翻訳における「正確さ」と「美しさ」の共存という課題を、具体例を挙げながら考察した。サンスクリット語や伝統的な漢訳語で理解されてきた仏典の術語を、あらためてそれぞれの文脈に即して現代日本語への翻訳を試みるのは重要であるが、哲学的概念のばあいにはきわめて慎重かつ厳密な議論が求められ、また「文」を重んじた翻訳に際しては文学者との協業をも視野に入れる必要があると論じた。

田中ケネス氏（武蔵野大学教授）は、“Topics on English Translation of Chinese and Japanese Buddhist Scriptures: With a Focus on Shin Buddhist Terms and Concepts”（漢語仏典・日本語仏典の英訳をめぐる一とくに浄土真宗系術語を中心として一）と題して、「阿弥陀」「悪業」「浄土」「名号」「念仏」等の浄土真宗系仏典における術語の翻訳をめぐる諸問題を紹介した。その上で氏は、「信心」を一例として採りあげ、先行する上田義文（“*shinjin*”）、武田龍精（“*faith*”）が採用したそれぞれの訳語を考察しながら、氏自身が提案する訳語（“*awareness*”）に込められた意図—「悟り」や「智慧」を重んじる仏教伝統との連続性の強調等—を詳説した。

チャールズ・ミュラー氏（東洋学園大学教授）は、“Translation and Textual Research through the Combined Usage of Digital Canons and Digital Lexicons: Applications of the Digital Dictionary of Buddhism”（電子仏教辞典のアプリケーション—デジタル仏典・辞典の相互利用による原典および翻訳研究—）と題する発表を行った。氏自身が中心となって構築し、現在では国際的に広く利用されている「電子仏教辞典」(*Digital Dictionary of Buddhism*) の歴史と特色を紹介した上で、それが大正新脩大蔵経データベース (SAT) 等の関連データベースと連動することにより、仏典研究においていかに有効なツールになりうるかを、パワーポイントを活用しながら具体的に説明した。

最後にコメンテーターの荒牧典俊氏（京都光華女子大学教授）が、以上の七人のパネリストの発表に対して簡単なコメントを加え、併せて、仏教の基本術語を翻訳するに際して求められる三つの基本原則を提示した。その上で氏は、「基本的な文献の選択」「文献学の方法に即した訳語の確定」「地球環境時代の哲学にふさわしい訳語選択」の三つの原則それぞれを、二真理（二諦）説の視点から詳論した。

その後、コメンテーターによるコメントと、参加者から寄せられた質問をもとに活発な質疑応答と議論が交わされた。仏教術語の基準となる現代語訳を考える上で、以上のようなパネリストの発表、コメンテーターの提言、参加者から寄せられた質問や意見はいずれも貴重で、私自身も学ぶところの多いシンポジウムであった。

（『東方学会報』94, pp.19-22 より転載）



<Symposium V>

Past, Present, and Future in the Translation of Buddhist Texts:
Towards the Creation of a Standard Japanese-English Glossary

53rd International Conference of Eastern Studies, Tokyo, May 16th, 2008

SAITŌ Akira

An enormous number of technical terms appear in Buddhist scriptures and treatises. While based on Sanskrit and Middle Indo-Aryan languages, including Pāli, many of these were translated into other languages, especially Chinese, and became established as terms that have been widely accepted in the world of East Asian Buddhism down to the present day (e.g., *ssu sheng-ti / shi shōtai* 四聖諦 [*catvāry āryasatyāni*], *wu-yün / go'un* 五蘊 or *wu-yin / go'on* 五陰 [*pañcaskandha*], *wu-wo / muga* 無我 [*anātman*], and *yüan-ch'i / engi* 緣起 [*pratītyasamutpāda*]). These terms also include some that, though based on concepts of Indian provenance, were established in the course of the development of Chinese Buddhism (e.g., *li-shih wu-ai / riji muge* 理事無礙 [“non-obstruction between principle and phenomenon”], *shih-chieh hu-chü / jikkai gogu* 十界互具 [“mutual possession of the ten realms”], and *ts'ao-mu ch'eng-fo / sōmoku jōbutsu* 草木成佛 [“attainment of Buddhahood by grasses and trees”]).

These could all be said to reflect the finely-honed intellect and sensibilities of not just Gotama Buddha, but also those who transmitted the *sūtras* and *vinaya*, as well as scholars and authors of treatises. Nor can one overlook the efforts of those who translated the *sūtras* and treatises into other languages and the scholars who, taking into account the philosophical background and sectarian traditions, coined appropriate terms for giving expression to different ideas. Traditional terminology includes many superb translations that are succinct and to the point, such as *yü-an-ch'i / engi*, *wu-wo / muga* (or *fei-wo / higa* 非我), and *chung-tao / chūdō* 中道

(*madhyamā pratipad*), and these have long become part of the Japanese language.

Nonetheless, it could be supposed that for Buddhism, with its history spanning more than 2,400 years, an attempt to reexamine the meaning of these many terms in their respective contexts and then gather together the wisdom of many experts with a view to bringing these terms to life in the contemporary language might be a quite important task. The objective of such an exercise would be to take up for consideration the more important *sūtras* and treatises that were composed in India, extract the definitions (or rules about usage) of terms used in these works, and, as well as comparing these, establish standard translations, on the basis of which one could raise some substantial questions directed towards a full-scale examination by academia as a whole.

When translating these terms into modern Japanese, not only must one take into account the situation regarding the translation of technical terms in the adjacent fields of philosophy, ethics, Chinese thought and culture, religious studies, and so on, but consideration of the extent to which Buddhist terms have taken root in related fields such as the Japanese language and Japanese literature is also indispensable. Further, when one looks squarely at the phenomenon of globalization at a cultural level in the present age, one also realizes that there is a need to consider the translation of Buddhist terminology into English, which, regardless of how this trend might be viewed, is expanding its functions as a *lingua franca* transcending national and ethnic differences, and to actively respond to this through international academic exchange.

This symposium was planned with the aim of providing a venue for seven panelists sharing these perceptions and a commentator to discuss freely various issues surrounding the translation of Buddhist texts.

The symposium began with introductory remarks by Saitō Akira 斎藤明, the convener, who, after having briefly explained the aim of the symposium as outlined above, introduced each of the panelists and explained the overall program of the symposium.

Enomoto Fumio 榎本文雄 presented the first paper, entitled “Fundamental Terms of Early Buddhism: Problems in Translation,” in which he touched first on the lines of enquiry necessary for determining the meaning of a Buddhist term and then went on to discuss in detail the example of *āryasatya* (*ariyasacca*), often translated as “noble truth.” According to Enomoto, as far as can be judged from actual usage and definitions, the word *ārya* is in actual fact seldom used adjectivally as the first element of a *karmadhāraya* compound, and in most instances it refers to a person such as a Tathāgata, *pratyekabuddha* or *śrāvaka* or, more generally, an “outstanding” or “noble” person and functions as the first element of a *tatpuruṣa* compound. Enomoto therefore concluded that *āryasatya* means “reality (or truth) for an outstanding person (or outstanding people)”

Next, Sako Toshio 佐古年穂 presented a paper on “Abhidharmic Concepts in Translation: Problems and Perspectives,” in which, basing himself on the *Abhidharmakośabhāṣya*, he examined the ten “lesser afflictions” (*upakleśa-bhūmika*) listed by the Sarvāstivādins. Having first cited the definitive explanations of each of these ten afflictions, he comparatively examined the original Sanskrit of each term and Chinese translations by Hsüan-tsang 玄奘 and Paramārtha and discussed in detail points that need to be borne in mind when translating them into modern languages. For example, in the case of *mraṅka*, translated by Hsüan-tsang as *fu* 覆 and by Paramārtha as *fu-ts’ang* 覆藏 or *hen* 恨, he suggested that if one follows the definitive explanation “to conceal a fault,” it could be translated into modern Japanese as *inpei* 隱蔽

and into English as “concealing.”

Katsura Shōryū 桂紹隆, in a paper entitled “Key Terms of the Buddhist Epistemological Tradition: Problems in Modern Translation,” discussed in some detail, and with reference to several examples (*vipakṣa*, *viruddha*, *virodha*, etc.), how to translate terms in the field of Buddhist epistemology (including theories of perception and inference) into modern languages. In particular, he discussed the question of the advisability of using terms that have become established in Western philosophy while taking into account the pros and cons of Hsüan-tsang’s translations of such terms, and he stated that this was a question that needs to be considered carefully case by case. In addition, he mentioned several relevant pieces of research that can serve as useful tools for determining the meaning of various terms.

The afternoon session began with Saitō Akira, who spoke on the subject of “Tibetan Translation: Characteristics and Problems.” Having first surveyed the history of the translation of Buddhist texts into Tibetan, he discussed the characteristics of the *Mahāvīyūtpatti*, compiled in 814 to serve as a guide for translating Buddhist terminology into Tibetan, and the *Madhyāvīyūtpatti*, which deals with especially difficult terms. In particular, he examined an aspect of what might be described as the synthetic quality of Tibetan equivalents to be seen in examples such as *sangs rgyas* (“he who has awakened and opened up”) for *buddha* and *bcom ldan ’das* (“he who has vanquished [demons], possesses [virtues], and has gone beyond”) for *bhagavat*.

Next, Okayama Hajime 丘山新 presented a paper entitled “Appearance or Substance?: A Controversy on How to Translate the Buddhist Canon into Chinese,” in which he touched on debates about translation in the history of the translation of Buddhist scriptures into Chinese and examined with reference to concrete examples issues surrounding the coexistence of “accuracy” and “beauty” in translation. He argued that while it is important to translate into modern Japanese terms found in Buddhist texts,

which have until now been understood in the original Sanskrit or in Chinese translation, in accordance with individual contexts, in the case of philosophical concepts careful and rigorous discussion is needed, and for translations placing importance on literary qualities it is also necessary to consider collaboration with professional writers.

Kenneth Tanaka 田中ケネス then gave a paper on “Topics on English Translation of Chinese and Japanese Buddhist Scriptures: With a Focus on Shin Buddhist Terms and Concepts,” in which he discussed questions surrounding the translation of terms in texts of the Jōdo Shin sect 浄土真宗, such as Amida 阿弥陀, *akugō* 悪業, *jōdo* 浄土, *myōgō* 名号, and *nenbutsu* 念仏. He then took up the example of *shinjin* 信心 and, while examining the translations “shinjin” and “faith” adopted by Ueda Yoshifumi 上田義文 and Takeda Ryūsei 武田龍精 respectively, discussed in detail the motivation behind his own translation “awareness,” including an emphasis on its continuity with the Buddhist tradition attaching importance to “enlightenment” or “awakening” and “insight/wisdom.”

The final paper was presented by Charles Muller, who spoke on “Translation and Textual Research through the Combined Usage of Digital Canons and Digital Lexicons: Applications of the Digital Dictionary of Buddhism.” Having outlined the history and

characteristics of the Digital Dictionary of Buddhism, in the development of which he has played the leading role and which is now widely utilized around the world, he then used a PowerPoint presentation to explain in concrete terms how useful it can be in the study of Buddhist texts in combination with related databases such as the digital Taishō canon (SAT).

Lastly, the commentator, Aramaki Noritoshi 荒牧典俊, added some brief comments on each of the above seven papers and also presented three basic guidelines for translating the basic terms of Buddhism, namely, the selection of basic texts, the determining of translated equivalents on the basis of philological methods, and the selection of equivalents suited to philosophy in the age of a global environment. He then explained these guidelines in detail from the perspective of the two truths.

This was followed by a lively discussion based on Aramaki’s comments and questions from the floor. The papers presented by the panelists, the proposals put forward by the commentator, and the questions and opinions of the participants were all valuable for considering standard modern equivalents of Buddhist terms, and it was a symposium where I too learnt a great deal.

【Transactions of the International Conference of Eastern Studies, No. 53, 2008, pp. 142 - 146.】



第53回国際東方学者会議での発表風景

Newsletter No.1 **July, 2012**

The Creation of Bauddhakośa:
A Treasury of Buddhist Terms and Illustrative Sentences

【Grant-in-Aid for Scientific Research(S)】



http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/start_index.html

Bauddhakośa **プロジェクト事務局**

〒113-0033 東京都文京区本郷 7 丁目 3 番 1 号

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部

インド哲学仏教学研究室内

E-mail: b_kosha@l.u-tokyo.ac.jp